

大村敬一氏の書評へのリブライ

田中雅一*

まずは、拙著を書評していただいた大村さんに感謝したい。書評にも指摘されているように、本書は1997年から2011年にかけて様々なところで発表された文章を収めている。本書の出版は2018年であり、単純に考えても7年のズレがある。一部書き直したとはいえ、実際に書いたのは、さらに数年遡るかもしれない。多くは研究会の成果となる論文集に収められていたものであるため、各論文の主題もまた厳密には首尾一貫しているとはいえない。そういう意味で、けっして読みやすい書物とは言えないであろう。

本書の主題は誘惑とコンタクト・ゾーンであるが、思い入れが深いのは、前者である。コンタクト・ゾーンの方は、その可能性について割とすんなり思い至ったと記憶している。本書からは削除しているが、当時はアルジュン・アパドゥライのスケープ論やジョージ・マーカスのマルチ・サイテッド・エスノグラフィーなどと結びつけて取り上げていた。これに対し、前者に至る経緯には、ルイ・アルチュセールやミシェル・フーコー、そしてジュディス・バトラーなどとの、20年近い長い格闘があった。彼らへの批判は本書を読んでいただければ分かるが、誘惑がどう生まれたのかはあまり覚えていない。筑波での招待講演で言及したのがたぶん最初だろう。

誘惑に至る前の概念として重要なのはエイジェンシーやエイジェントである。ただし、これも大村氏が適切に指摘しているように、世間一般に受け入れられているような（抵抗する）行為主体という意味ではなく、エイジェンシーの第二の意味である代理という概念に注目して提案している。この代理という視点が、誘惑における主客の相互転換という考えと親和的なのは明らかである。私はここからさらに、背後霊や分身、ボディ・ダブルなどの民族誌に注目しているが、道半ばである（そうこう考えているうちにボディ・マルチプルという概念も現れてきた）。このような流れで無視できないのは、「受動性」である。能動的受動性、受動的能動性という概念が誘惑やエイジェンシーの背後に認められる共通の性格ということになる。具体的なメッセージが本書にあるとすれば、それは世界や他者に向けて受動的になりなさい、ということである。受動的になるということ自体すでに能動的だということに気づいてほしい。こうした主張は、前著『癒しとイヤラシー——エロスの文化人類学』（筑摩書房、2010年）で展開したものであった。

本書では、誘惑の領域として、研究対象となる社会での親密圏、研究者との交流（コンタクト・ゾーン）、そして民族誌と読者との関係を想定している（第3章）。ただ、大村氏

473

*TANAKA Masakazu 国際ファッション専門職大学 tanaka.masakazu@piif.ac.jp

も指摘しているように、それらを十分に論じているとは言えない。また、誘惑の世界を単純に親密圏と同一視するのも避けるべきであろう。誘惑は、そのような制度的な区画化を横断・侵犯する偶発的な概念として、より有効であり、独自性があると考えからだ。この点に関連して、大村氏は森林の地下に張りめぐらされている根を喚起するようなリゾーム上のネットワーク世界を想定している。私も、最近の論稿（「＜格子＞と＜波＞とナショナリズム——巨大な遺体安置所で *Love Trip* を聴きながら考えたこと」『文化人類学』82 巻4号、425-451 ページ、2018 年）では、波との関係でリゾームに言及している。大村氏の比喻に従えば、ある程度木々がまとまっている地上は格子の世界、地下は波の世界ということになるだろうか。地下（アンダーグラウンド）も、ワイルド・サイドに似て魅力的な言葉である。さらに、もつれ（entanglement）についても、コロニアルな状況を超えて、より根源的な概念として鍛え直す必要があるだろう。

たぶん、個別論文については、いろいろと疑問点や批判点もあるのかもしれないが、的確に本書のエッセンスを把握し、こういう形で評価していただいたことを改めて嬉しく思う。今後は、分身、アンダーグラウンド、もつれなどを念頭に、さらなる探求を目指したい。